

滑稽雜談

戌上

特別
~ 5
6326
17



清拙齋雜談卷之十七目錄

九月部上

初	九月	異名	日	寒露節	鴻雁來賓	雀入大水為蛤
二	霜降節	豺乃祭獸	日	草木零露	菊有黃花	日
日	秋分	日	長夜	日	日	日
四	鯉魚風	日	南郊之陽	日	日	日
五	不埒田奏	日	插宮權舍	日	日	日
七	菊酒	菊の酒を飲ぶ	日	花餅	栗の食	日
九	九日	鷹取	日	後雜	十	日
日	醜醜	日	韓馬	土	日	日
日	生虫	日	小種	日	日	日
日	泣	日	中多	日	日	日
立	赤土	日	野	日	日	日
日	豆名	日	恒	日	日	日

廿 天子一書曰 少室山
 廿一 八橋西院 廿二 神田
 廿三 國後系 廿四 後服系
 廿五 國後系 廿六 後服系
 廿七 國後系 廿八 後服系
 廿九 國後系 三十 後服系
 三十一 國後系 三十二 後服系
 三十三 國後系 三十四 後服系
 三十五 國後系 三十六 後服系
 三十七 國後系 三十八 後服系
 三十九 國後系 四十 後服系
 四十一 國後系 四十二 後服系
 四十三 國後系 四十四 後服系
 四十五 國後系 四十六 後服系
 四十七 國後系 四十八 後服系
 四十九 國後系 五十 後服系
 五十一 國後系 五十二 後服系
 五十三 國後系 五十四 後服系
 五十五 國後系 五十六 後服系
 五十七 國後系 五十八 後服系
 五十九 國後系 六十 後服系
 六十一 國後系 六十二 後服系
 六十三 國後系 六十四 後服系
 六十五 國後系 六十六 後服系
 六十七 國後系 六十八 後服系
 六十九 國後系 七十 後服系
 七十一 國後系 七十二 後服系
 七十三 國後系 七十四 後服系
 七十五 國後系 七十六 後服系
 七十七 國後系 七十八 後服系
 七十九 國後系 八十 後服系
 八十一 國後系 八十二 後服系
 八十三 國後系 八十四 後服系
 八十五 國後系 八十六 後服系
 八十七 國後系 八十八 後服系
 八十九 國後系 九十 後服系
 九十一 國後系 九十二 後服系
 九十三 國後系 九十四 後服系
 九十五 國後系 九十六 後服系
 九十七 國後系 九十八 後服系
 九十九 國後系 一百 後服系



滑稽雜談卷之第十七 九月之部上

四時堂共諺編錄

○九月 異名 季秋 ○月令曰季秋之月 玄月

雅 暮高 梁元纂要曰九月白 霜月 錄 古 菊月

天睢 貫月 五陰月 鴻賓月 戌月 亡射 ○前漢

律曆志曰亡射 作無 九月律也射厭也言陽氣究物而使

陰氣畢剝落之終而復始亡厭已位於戌在九月 ○白虎

通云射終也言万物隨陽而終當復隨陰而起無有終已

○史記律書曰無射者陰氣盛用事陽氣無餘也 晚秋

深秋 盛秋 菊秋 九秋 授衣 詩 殘秋

和名 長月 注補具依抄云授衣 九月

○萬葉集九月多てありとわす 長月

長月 今多とひり 九月

長月 今多とひり 九月

長月 今多とひり 九月

長月 今多とひり 九月

長月 今多とひり 九月

長月 今多とひり 九月

長月

長月の満ちる日のこと也月一と成るれば

長月祭

長月の満ちる日のこと也月一と成るれば

向月日

向月の満ちる日のこと也月一と成るれば

重月

重月の満ちる日のこと也月一と成るれば

新月

新月の満ちる日のこと也月一と成るれば

寒露節

素問馬玄臺註曰寒露節初五日

鴻雁來賓次五日雀入大水為蛤後五日菊有黃花

九月の節とて初五日とあり

鴻雁來賓

月令曰季秋之月鴻雁來賓注雁

以仲秋先至者為主季秋後至者為賓如先登者為主

從之以登者為客也

爵入大水為蛤

月令曰季秋之月爵入大水

為蛤注鳥爵一作為蛤飛物化為潛物也

菊有黃花

月令曰季秋之月鞠通有黃華注

鞠色不二而專言黃者秋令在金々自有五色而黃為貴故鞠色以黃為正也

霜降節

素問馬玄臺注曰霜降氣初五日

豺乃祭獸次五日草木零落後五日蟄虫成俯

豺乃祭獸

月令曰季秋之月豺乃祭獸戮禽

注祭獸者祭之於天戮禽者殺之以食也禽者鳥獸之總

名鳥不可曰獸々亦可曰禽故鸚鵡不曰獸而猩々通曰

禽也

草木零落

月令曰季秋之月草木黃落乃伐

薪為炭注備禦寒也

柝乃祭獸注祭獸者祭之於天戮禽者殺之以食也禽者鳥獸之總名鳥不可曰獸々亦可曰禽故鸚鵡不曰獸而猩々通曰禽也

蟄虫咸俯

月令曰季秋之月蟄虫咸俯在內

皆瑾其戶注俯垂頭也內穴之深處也瑾塞也

是月之

修りし流俗を去りて入又申入るるは秋の群用也

○露霜

也○礼記翔令日季秋之月霜始降○白虎通曰霜者霜

之始○千字文曰霜結為霜○景雅古今抄云霜の字他同

霜と云ふて霜と云ふるを多しと云ふは例に霜を多しと云ふは霜

と云ふは霜の字に霜と云ふるを多しと云ふは霜の字に霜

と云ふは霜の字に霜と云ふるを多しと云ふは霜の字に霜

と云ふは霜の字に霜と云ふるを多しと云ふは霜の字に霜

と云ふは霜の字に霜と云ふるを多しと云ふは霜の字に霜

と云ふは霜の字に霜と云ふるを多しと云ふは霜の字に霜

と云ふは霜の字に霜と云ふるを多しと云ふは霜の字に霜

と云ふは霜の字に霜と云ふるを多しと云ふは霜の字に霜

と云ふは霜の字に霜と云ふるを多しと云ふは霜の字に霜

万十 行々不相結故之方乃天露霜小沾在哉 柿か丸

万十 露霜乃寒夕之秋凡丹黄葉尔来毛妻梨之本者 作者未詳

○露時句

則凝為霜雪陽氣勝則散為雨露○御筆日霜時句秋之佳句

と云ふは霜の字に霜と云ふるを多しと云ふは霜の字に霜

と云ふは霜の字に霜と云ふるを多しと云ふは霜の字に霜

と云ふは霜の字に霜と云ふるを多しと云ふは霜の字に霜

と云ふは霜の字に霜と云ふるを多しと云ふは霜の字に霜

と云ふは霜の字に霜と云ふるを多しと云ふは霜の字に霜

と云ふは霜の字に霜と云ふるを多しと云ふは霜の字に霜

○秋霜

淮南子曰至秋三月青女乃出降

以霜雪音女乃天神音天王音女乃天神音天霜雪者也○初霜をり秋霜の佳句と考

○長夜

淮南子曰陽氣勝則日脩而夜短陰氣

勝則日短夜脩○文選潘岳秋興賦曰何微陽之短晷覺

夫木 山里にありてはもほむいぬ初霜の佳句也 九月の夜 龍宗

凉夜之方永 ○白居易搗衣詩曰八月九月正長夜 ○或

作曰秋の夜を長くするは秋の心なり ○秋の夜を長くするは秋の心なり ○秋の夜を長くするは秋の心なり ○秋の夜を長くするは秋の心なり

万十

感者之痛情無跡將念秋之長夜半寐師耳 作去来律

○夜寒

○繁欽賦曰何是秋之惛悒處良夜而

懷愁風淒涼以激志樹動葉而鼓條 ○柳金白秋の夜を長くするは秋の心なり

○秋の夜を長くするは秋の心なり ○秋の夜を長くするは秋の心なり ○秋の夜を長くするは秋の心なり

○秋の夜を長くするは秋の心なり ○秋の夜を長くするは秋の心なり ○秋の夜を長くするは秋の心なり

万十

思嘆八師不意登為跡金凡之寒吹振者君半之方念 作去来律

曰八

秋立而幾日毛不有者此宿流朝困之凡者乎本寒每 安貴王

△肌寒

○歐陽永叔秋声賦曰其氣慄冽破人

肌骨注 以石刺病曰破 ○秋の夜を長くするは秋の心なり

秋の夜を長くするは秋の心なり ○秋の夜を長くするは秋の心なり ○秋の夜を長くするは秋の心なり

○鯉魚風

○大石 五雜組卷曰李賀詩門前流

水江陵道鯉魚風起芙蓉老鯉魚風乃九月風也 ○如氣

如氣也如氣也如氣也如氣也如氣也如氣也如氣也如氣也

○南都八幡祭二日 ○神社啓蒙曰奈良八幡在

大和国添上郡東大寺中也所祭之神同宇佐北畠准

后説曰孝謙天皇御宇天平勝宝元年依八幡神託造宮

○改曆雜事記曰孝謙天皇天平勝宝二年宇佐八幡東

大寺入御 ○唐彦瑳妻抄曰平蹠テカキ門カキのカキ在カキ建カキてカキ詔カキの

○御打三日 ○三月廿一日御打三日

○日野祭五日 ○雍州府志曰萱尾大明神在日野土人不知祭何神也按日野法界寺縁起云日野家宗卿建立法界寺於家領日野地以傳教大師所贈之藥師

為本尊傳教為用祖于時准比叡山之側勸請日吉社以

為法界寺之鎮守則此社是也然則所祭大已貴命也每

年九月五日有祭礼 ○南世江次第曰不堪佃田申文九月

不堪佃田七月 ○江次第曰不堪佃田申文九月

或曰大臣大弁着陣史奉仕申文其儀如常申文上卿先

見目錄左置次用懸紙展用諸国申文如本結其後結申次

有奏詞云某等乃國乃申當年不堪田乃坪付乃文申云

申大弁九月五日申不堪日八月廿日以前進坪付帳九月一日

出御書御座大臣進奏文主上先開文一々御覽畢 ○又

日和奏之度結詞回々乃申世苗當年不堪作留田乃

坪付乃文上達部加久定申世利 ○續日本紀第二文武

天皇大宝元年八月甲寅播磨淡路紀伊三国言大凡潮

漲田園損傷遣使巡監農桑存問百姓 ○三根原曰是法

由田如換之云云而存録云々奉々々々々々租税云々云々

此寺より南を多行ゆり坪分帳をなれと書陣とて空ありて此由小
形に作りたりとも同くしむる意用とてや

中納言 此寺より南の寺に録帳をひてはるる坪分帳也 女房
有在

○桂宮相撲會 八日 ○拾芥抄曰桂宮一町六條北

西洞院西詔所 ○又曰九月八日桂宮相撲會 ○今昔物語

曰大層の馬の勝負より勝る傍を勝とていふより如勝負をいふ人ともいふ事也
洞院桂宮のあまらる種の本も昔昔の宮のまの御心ありてはるる
云々 新田桂宮といひの種をいふ歌を宮の御心も編みぬ事也云々

○泉涌寺今判書 八日 ○當今判書岩元曰昔は涅槃の付

羅刹足跡見回と云て此寺と採奪より華陀天降伏と云るをいふ書
おまじひ才と云をも以滅後一千六百餘年の後をいふ蓮寺の宣律師
戒音善徳の威徳冥感の通し草庵云形と云く二端以戒と云く報也
とては今判と採りぬり千より蓮寺の細り今宮の宮也と云く採後

日記及びそのあの中具後依律師の事也堪海書師宗土といふ事か
二寺法を志して此寺より白蓮寺を経て今判と云く採りぬり古来の
願徳と云くと仲言同ちちの宮置判也云々宮家の宣律師復嚴
重なり採りぬり蓮寺の御心と云く採りぬり千より蓮寺の細り今宮の宮也と云く採後
二階の御心と云く採りぬり蓮寺の御心と云く採りぬり千より蓮寺の細り今宮の宮也と云く採後
寺の御心と云く採りぬり蓮寺の御心と云く採りぬり千より蓮寺の細り今宮の宮也と云く採後
よ之任し一在後一因りりも万里海海の中懐いふ此寺の御心と云く採りぬり千より蓮寺の細り今宮の宮也と云く採後
是と云く採りぬり蓮寺の御心と云く採りぬり千より蓮寺の細り今宮の宮也と云く採後
と云く採りぬり蓮寺の御心と云く採りぬり千より蓮寺の細り今宮の宮也と云く採後
と云く採りぬり蓮寺の御心と云く採りぬり千より蓮寺の細り今宮の宮也と云く採後
を採りぬり蓮寺の御心と云く採りぬり千より蓮寺の細り今宮の宮也と云く採後
判書と云く採りぬり蓮寺の御心と云く採りぬり千より蓮寺の細り今宮の宮也と云く採後
是より採りぬり蓮寺の御心と云く採りぬり千より蓮寺の細り今宮の宮也と云く採後

○重陽宴 九日 ○續日本紀曰光仁天皇天應元

年秋九月戊午宴五位已上於内裏位宴訖賜祿有羞

延喜式式部曰九月九日菊花宴應召文人者前二日省

簡定文章生并諸司官人堪属文者當日質明掃部寮設

座如常輔以下就座計列文人即造名簿卿若輔以名簿

奉進内侍辨式餘節應召文人者准之九月九日文人雖

又獻詩人者准之移中務省日注記其名○事相傳自九月

又錄共至積祿所授大藏省共監給祿事

九月九日也是日重陽之宴行也九月九日

九月九日也是日重陽之宴行也九月九日

九月九日也是日重陽之宴行也九月九日

九月九日也是日重陽之宴行也九月九日

九月九日也是日重陽之宴行也九月九日

△重陽

○卓氏藻林曰楚辭云重陽天有九

新雅 法人のりくのきく句つてふ重陽のりくのきく ぬるか

重故曰重陽々々集入帝宮○西京雜記曰漢武帝宮

人賈佩蘭九月九日佩茱萸食餅飲菊花酒今人長壽蓋

自古相傳莫知其由魏文帝與鍾繇書曰歲往月來忽彼

九月九日月日並應陽教故曰重陽○凡土記曰九月九

日律中無射而數九俗尚此日折茱萸房以挿頭言辟除

惡氣而御初寒前集十一

以雜 夕つてあふ月ひしおるぬきかしのころあひあひのきく 西京

○菊酒

○西京雜記曰采菊花莖葉雜秫米

釀酒至次年九月始熟用之○五雜俎曰九月佩茱萸登

高飲菊花酒相傳以費長房教桓景避災之術余按戚夫

人侍兒佩蘭言在宮中九月九日食蓬餅飲菊花酒則漢

初已有之矣不始於桓景也○舊唐書曰九月九日菊

黃酒巨且肝血○年廿拾陸曰唐の貞元四年に天子詔して正月晦三

月廿九月九日之節に群寮あつて酒宴あつて九月九日 舊唐書

昔より諸君思ひはるはるの事、其草とハ穉邪毒とハ菊とハ延壽
客とハ存ふは二つとかりて陽九の厄とけも、その瑞琳代穉毒ハ續糸活化を
勝もよみ難細ハ今梅ハ韻極ハ採ハ事ハ漢式則赤黄採宮人々衣と
云るもげなむと多々也初そハ唐の年九月九日、後て菊酒の宴とせり
と云ふりきく ○ 延喜式 中宮 職式 曰九月九日平旦供奉菊酒如
常儀

風雅集 あつ日の菊のふらりと九重のいさるも秋のけしき 山階 松尾

○ 補食監曰菊酒有二種一種用菊潭水造酒賀州有菊
川兩岸多菊至秋黄花爛熳摘其花汲川流併煮取汁釀
成米麴作酒賀公餞之四方一種用黄花漫干燒酒中經
數日煎沸收貯于甕中入冰糖數日而成肥後国守餞之
四方俱謂明自愈頭痛祛風及婦人血風

△ 菊の供

○ 魏文帝書曰九月九日草木徧枯而
菊花紛然今奉一束 ○ 世後同言曰重陽之菊と云ふは魏の文
帝のちねは秋はさき後上り秋と例も似てくるを菊とを位するの
てはうを勝たの事、命とあつては種もあつてはちやちやうの耐乾とつてあつて
そのあつては耐乾と云ふ人のりまゝの菊をとりてのりまゝ採りては
帝を敬ふのひては菊をまゝとらば、そのひては世に流るる帝と帝
の菊をとるても菊とほのひては

御用凡 九月廿二日菊の白もあつては、けしき 在酒

△ 菊のふり

○ 源田物産記のそま九月九日、
おひひり菊 ○ 世後同言曰菊のふり 世後同言曰菊のふり
つとまの菊とつてあつては、そのひては、
まゝに採りては、そのひては、
庭に採りては、そのひては、

凡く是れも酒の味に似たり。其の味を酒とせば、酒と名付て而して其の味を
らんとす。酒の味に似たり。其の味を酒とせば、酒と名付て而して其の味を

まふ。 恒程有り。其の味を酒とせば、酒と名付て而して其の味を

○補當時年中行事曰御菊居九常御殿南庭階或西植菊
被置御綿陰陽師大黒勤此事。 強赤供御自供御所出
道喜調進之。○は況は酒を名付て其の味を酒とせば、酒と名付て而して其の味を

△ 温酒

○世後同言曰後之酒を名付て其の味を酒とせば、酒と名付て而して其の味を
日之温の味に似たり。其の味を酒とせば、酒と名付て而して其の味を
酒と名付て其の味を酒とせば、酒と名付て而して其の味を

△ 茱萸仕袋

○西京雜記曰九月九日佩茱萸令
久長壽。○延喜式典藥曰凡九月九日吳茱萸把附藥
司供之。○本草根原曰凡九月九日吳茱萸把附藥
○杜甫詩曰明年此會知誰健醉把茱萸仔細看。○
凡土記曰九月九日茱萸熟折其房挿頭云辟惡。

△ 栗と食

○歲時雜記曰重陽尚食糕而重陽為
盛大率以栗為之或加以栗亦有肉者。○和信手記曰栗

子と茹物とをきと書味りふふの節供と稱すもその節に丸 ○近キ式

大日九日節料 梨子 大豆 苗子 栗子 麥子 桃子 分料畧之

△**粗粉** ○壺中贅錄曰重九作粗粉蜜餌皆以糖

和米麩為之 ○順和名曰粗粉和名於古 ○子利長は

糲粉糲粉も其年の節に和信の節に用てはすりぬ

△**瘰水符** ○金門歲節曰洛陽人家重陽作迎涼脯

羊肝餅佩瘰水符 ○おれのもも和信の粘りをもめはりしり

△**登高會** ○風土記曰以重陽相會登山飲菊花酒

謂之登高會又云泛菊會 ○續齋諧記曰汝南桓景隨費

長房遊學累年長房謂之曰九月九日汝家當有災厄急

宜去令家人各作絳囊盛茱萸以繫臂登高山飲菊酒此

禍可消景如言奉家登高夕還見雞犬牛羊一時暴死長

房曰代之矣今人每至九日登山飲菊酒佩茱萸囊是也

言の月日 延へるの節に於ては秋と云ふもその節に丸 ○近キ式

集名 延へるの節に於ては秋と云ふもその節に丸 ○近キ式

△**花饅** ○宋史曰九日以花饅法酒賜群臣

△**鹿饅** ○歲時記曰民間九日饅上置小廉數

牧號食祿高

△**頭上饅** ○歲時記曰九日以片饅搭小兒頭上

乳飽祝云百事皆高 ○その節に饅と云ふもその節に丸 ○近キ式

△**九日平座** ○江家次第曰九日平座上卿着左

仗座令藏人奏可給從臣菊酒由藏人飯來仰聞食由上

卿仰裝束并令居饅上卿以下移着宜陽殿座并少納言

着座一獻二獻勸索餅三獻居飯汁物箸下四獻最末參

議降座轉坏於侍從座計度數飲上卿令官人召外記持

參見參付藏人奏聞其後拜舞畢各退出 ○或る節に

參見參付藏人奏聞其後拜舞畢各退出 ○或る節に

古事記に神皇正統記の文に云く、
乃りての事也

△賜水奠 九日
此奠と稱す則ち

○後の雛 九日
和曲の女兒雛ありて云々

○
此の雛は...

○御香宮みかみや九日
神社啓蒙日御香神社在山

城固伏見みやこ京町東所祭之神一座乎
○神功皇后 里
諺云鎮座年紀未分明從昔垂跡此地也秀吉筑城棚之
日雖奉遷神籬於東岳今古御神崇教起矣依是又奉遷
舊地云即今神地是 ○一説は南社延喜式所載神籬在
此事乃又言自叙中御香の事は

○醍醐みづがほ九日
當寺記日所祭茅一清滝権

現沙迦羅童子第一女也第二女為仁世成道來而在醍

醐山又延キ二年二月七日現清滝権現形降臨聖宝尊
 師於持念壇上示曰吾是沙迦羅竜王女也昔在唐土名
 青滝即住此山護念然便寺号青竜寺我則護密乘故今
 凌万里垂跡於此山於恩光於法界 茅二長尾天神當
 寺者延キ帝依為御願寺為者往昔之御遺恨勸請 茅
 三勝回明神々縁社記未詳記上名 ○傳言南山の布衣延キ
 青滝を乞ふの時大國者を檢別万程の一室と稱て建三より不不成
 建三の時種梁おつゝ例を事成りて皆を乞ふ延キ帝の山邊を修す
 官古の山根、病て言々の成りぬは法乘也と者めは樂良しと傳言
 傳言の傳言の奉替と指し神師は言成りぬは法乘也と者めは樂良しと傳言
 許のは聖料とてしむるありての社に當りては能く安んじりて其の教
 樂接は社樂二基と伝言なりて其の社の上は法乘也と傳言
 の事傳のは樂神とてしむる也傳言確りてしむる也

○鞍馬山

○諸神記曰由鞍馬寺 天慶中勅請之

後宇多院延慶元年五月十七日前左大弁宰相宣房朝
 臣為奉行被仰下云件神有尊崇事可被授位記本位可
 注申者本位不詳五條天神正治二年四月廿五日被奉
 授正五下時本位不詳以嘉祥二韓神位記被授之由注
 進之以之案之件明神疫神欽○神社啓蒙曰靴神社在
 山城国愛宕郡鞍馬山所祭之神一座大己貴命 按此
 社天子不豫世上騷動之時懸靴於此神前故号由木也
 盖大己貴少彦名共療疾病治天下之神所以五條天神
 及當社有懸靴之遺法或説為素戔嗚者非也○當世に
 ては傳の主人の社に當りては法乘と稱て建三より不不成
 の事傳の主人の社に當りては法乘と稱て建三より不不成

○貴布祢社 九日

○神社啓蒙曰貴布祢社在山城国
 愛宕郡鞍馬北可一里所祭之神二座高麗神水德神也
別雷神宮

第^二樓 ○神代卷日伊弉諾尊斬訶遇突智為三段其一
 社也 段為高靈龍^{夫可エ} ○神書抄曰竜神類也蓋有旨哉 ○日本
 後記日弘仁九年五月為大社 奥御前 ○氏成私記日
 為平安城守護所祭之蓋日域地守神明也 ○二十二社
 註式日貴船社^{船王命与高靈也} 同九月九日小兒称
 貴船神輿振洛内者何耶日改曆雜事記日人皇百六代
 後奈良院御宇小兒咳逆疫而死亡甚衆仍令相者卜焉
 即貴船神之所崇也於是乃同御宇弘治二年重九日令
 逐疾蓋是乎 ○中世九月九日^{皇御前} 集て^舟 遊りて
 貴船の社也^{舟に} 振りて^舟 扶^舟 舟の社也^{舟に} 舟の社也^{舟に} ○^舟
 舟の社也^{舟に} 舟の社也^{舟に} 舟の社也^{舟に} 舟の社也^{舟に}
 舟の社也^{舟に} 舟の社也^{舟に} 舟の社也^{舟に} 舟の社也^{舟に}
 舟の社也^{舟に} 舟の社也^{舟に} 舟の社也^{舟に} 舟の社也^{舟に}
 舟の社也^{舟に} 舟の社也^{舟に} 舟の社也^{舟に} 舟の社也^{舟に}

○柳谷系 九日
 日有祭礼 ○名無志日麻谷系^{舟の社也} 舟の社也^{舟に} 舟の社也^{舟に} 舟の社也^{舟に} 舟の社也^{舟に}

○生玉系 九日
 神社啓蒙日生玉神社在横津国

東生郡天王寺邊所祭之神一座天生玉神 旧事記日
 活玉命新田部直遠祖也 ○社家注進日天孫瓊々杵尊
 降臨之時陪從三十二神之中天活玉命是也神武天皇
 戊午年春二月到難波之碕日祠此神云爰去明忘年中
 本願寺僧來此所而創寺院以神地接境内矣依斯神惡
 不潔罰被僧也于時懷神殿造替之宿待而令神至藤原
 吉勝告願辭也數日後起寢床遂奉遷替神殿^{今旅邊} 其後
 信長兵燹之日殿閣悉為灰然^以 神聖遷別取耳慶長
 年中秀吉築城郭之序遷今神地 ○^{舟の社也} 舟の社也^{舟に} 舟の社也^{舟に} 舟の社也^{舟に} 舟の社也^{舟に}

今も其地源をより西物風流好む物之古御守りの神を祀りて
後の御守り一處に祀りて之

○八条天神社 十日

○神社啓蒙曰五条天神社在山城国帝京西洞院五条松原所祭一座少彦名命○神代卷曰大己貴命与少彦名命戮力一心經營天下獲為顯見蒼生及畜産則定其療病之方又為攘鳥獸昆虫之灾異則定其禁厭之法是以百姓至今咸蒙恩頼○啓蒙曰按當宮影向之年紀未知焉然此迁都日祭之乎○其月十日律令之儀云云此後とも此の儀は云々

○南禅寺 十日

○南禅寺家僧説曰世傳文志帝飼牛人居綾戸小路也昔行宮之通衢也通天授前常造醇酒献上帝愛之死有冥土人建小祠焉忘永丙子伯英和尚住山之二年建大祠移此正位正一位綾戸大明神云○南也にて南門の氏産河の社と云ふ毎夏八日を此の社に奉りて奉る俗に南無と云ふ

○大津四宮 十日

○神社啓蒙曰四宮神社在近江国志賀郡大津之駅所祭四座 大比魯日吉社記云小比魯 同日 國氣比 哀帝也 仲小禪師 出見尊也 按當社者日吉、榊殿也故以四座迁于此地欽里諺相傳曰此神鎮座之日官幣使四位基也故号四位宮云 推此説甚非也是四神鎮座之故有此号矣○是俗に大津を稱して四宮の古社門公好多路如也と云々中江常寧院殿の今日を朝に在るなり
みよとて四宮之神事法を云々云々云々

○大津 十日

○神社啓蒙曰伊勢向神社在山城国綴喜郡淀駅小橋之東河中所祭之神一座天逆向津姬命日吉社記云天照大神也○石清水社家記曰依八幡遷幸之縁号伊勢向而祠于此云○此社屋の築年並に隣村村産河と云々

○下名 十日

○此社名曰田中と云々所祭神を云々

上多相及極其後の意河神を合自御座より小社遷す其の

○例幣並小安殿行幸 十一日

○續日本紀 勞曰元正天

皇養老五年九月乙卯 天皇御内安殿遣使供幣帛於

伊勢太神宮并以皇太子女井上王為齋内親王 ○江家

次第曰小安殿行幸十一日 前一日御裝束如記文 本書

當日遣内侍以下主殿寮供御湯公卿參陣上卿奏宣命 往見

清書出御南殿寄御奠 參議次將 掃部供蒞道主殿撤祀

參議中將進用御輿戶傳内侍劔置奠中御前次乘御面

殿後房 謂小 下御出御於御屏凡東御座次天皇召舍人

少納言跪板勅中臣忌部召 世 忌部稱唯昇自小安殿南

階拍手取外宮幣下授下部次又取内宮幣下勅中臣參

來稱唯進昇階勅如常能申進 禮 又曰天皇宣命毛奉留

申天 奉禮中臣退下上卿召使王於座前執給宣命宸儀

入御外記進檀上申使王申御馬由上卿令藏人奏之勅

許之後即仰外記次還宮 以幣物不 ○又曰例幣次第 無

式早旦先裹内宮料 内侍年忌部 錦一匹 藏人所 兩面一

匹綾五匹 青黃赤 以調布結其上入柙篋 綿結 以葉蓍裹

之 付短 又裹外宮料五色絹次居小安殿内藏寮護之同

寮書送文次神馬事四匹 左右各三匹置 ○又曰行幸神

祇官被立伊勢幣儀 多同前儀 延喜式 大政 曰凡九月

十一日行幸八省院奉幣於伊勢大神宮其使者大政官

預點五位以上王四人卜定 用古食 大臣奏聞宣命授使

王共神祇官中臣忌部奏遣 ○後白鳥奉事以自土日例幣儀

幣儀の如く 幣使神祇友門として二奉りて後、御座より

○三奉根御自一日りりて申すこと信在幸惟膝の全月と儀其大作りて存す

例幣の如く、毎日の如く、申すこと信在幸惟膝の全月と儀其大作りて存す

此等申長忌ヲ初トシテ奉ル儀ト信在幸惟膝の全月と儀其大作りて存す

此等申長忌ヲ初トシテ奉ル儀ト信在幸惟膝の全月と儀其大作りて存す

此等申長忌ヲ初トシテ奉ル儀ト信在幸惟膝の全月と儀其大作りて存す

奉事之儀... ○梅原家年中行事記曰例幣
 中ノ儀... ○柳原家年中行事記曰例幣
 上ノ儀... ○柳原家年中行事記曰例幣
 見畢返授宣命於内記次上卿召官人令撤執就弓場奏
 聞相從此次奏使王御馬之事次職事奏聞畢返給仰使
 王御馬事聞召之由上卿給内記宣命仰神祇官可持參
 之由退出次上卿以下參神祇官并外記史同入門着座
 次上卿入南門着座并外記史同入門着座
 共傳并沙汰之上卿參向史前并先着幣累座
 史生官掌二人着座
 奉事之儀... ○梅原家年中行事記曰例幣
 中ノ儀... ○柳原家年中行事記曰例幣
 上ノ儀... ○柳原家年中行事記曰例幣

問使參否此次仰使王御馬給之由次以召使仰内記宣
 命可持參之由次上卿移着北廳代座并以下着
 座召使候使所内記持參宣命進着座使此間四姓次御幣
 爨遣上卿以下平伏次上卿以召使召使王賜宣命引御
 馬次上卿召内記返給管次自下觸起座○栗賦曰兩宮
 例幣陣儀十一日 上卿納言下行 奉行職事三奉仕并石
 少納言石二奏聞 内侍二石之内侍所御最花石二大内記石二大
 外記石二官務石二小史石二小外記石二少内記石二主鈴之内一石
 陣官入石一石使石一大藏省石一主殿寮石一掃部寮石一小舍人
 石使部二人石一主水司石一戸屋主石一南座石一又曰調
 進方宣命紙石一書寮宣命石一御草鞋石一陣疊石一藏
 石卜串石二大外記殿上疊石六出納小板敷疊石一掃部頭
 小篋二枚石掃部頭二軾五掃部寮高簾縁半疊石掃部頭兩面
 厚疊石掃部頭一厚口座中三幔一主殿寮布毯人五掃部官又

左右馬寮二石行告使石一內藏寮史生二人又奉幣藏
省內藏寮隔年官符五石送文隔年藏寮大藏省帷門代三
調進十五石字案二脚九石工寮黃緣半疊小筵二枚薦九枚掃部儻
勢參向使王中臣忌部衛士給之行二百石右丈石補

年和合 七月廿七日 奉幣行 十一日

○齋王群行 十一日

六年以弟二皇女倭姬命初立赤宮後代々皇女立之土
御門院兼元二年至四十一代赤宮後鳥羽院皇女隸子
內親王斷絕赤宮深草院笑子內親王斷絕○返キ式日
几天皇即位者定伊勢大神宮赤王簡內親王未嫁者卜
定若無內親王者依世次簡諸王女卜定○江家次弟日
赤王群行十一日或前一日小安殿裝束如常儀大極殿
高御座以東至第三間母屋內鋪滿葉薦第二間少向翼
裝飾御座其良方東戶間北柱頭設赤王御座其座南鋪

羽薦一枚立小机二脚置御幣料御座北敷兩面帖一枚
為閨白座其外有中臣忌部版位早且御湯殿內侍以下
向八省令累幣次行幸召卿奏宣命草並清書次申赤王
出野宮了由自藏人所遣小舍人令案內申之次行幸御
小安殿次改着帛御裝束次赤王西川襖畢入自藻壁門
御於嘉喜門先是於藻壁外奉御麻上次行事并奏赤王
候由次宸儀渡御大極殿藏人持候御笏並赤王額櫛管
等此櫛先仰作物所許以黃入金銀蒔繪管枋四松竹枝並
鶴等蒔之御座定後召御笏次中臣取御麻內侍於戶外
傳取奉獻震儀一撫一吻返給內侍中臣受之退出次宸
儀端笏拜御幣兩拜次令五位藏人仰赤王可參入由次
赤王入自嘉喜門御前并寮頭助相扶內侍及乳母次王
奠登自殿北面東第一階圍司園戶赤王入自同戶着座
着羅地摺裕褱同日深裳着玉鬘依未天皇勅中臣忌部
成人不可上髮給又御乳母可奉抱

召^世兩宮幣取式前送 又勅令奉進齊内親王者此依
恒例^一三个年間波斎清^互天照大神乃御杖代仁定奉
進内親王曾中臣宣久吉久申^互奉進礼登宣次天皇召
額擲管内侍奉仰進齊王許申可進參給由親王近候御
前^{御乳母奉抱女}天皇以擲刺加其額勅京乃方江趣支
給^{不奈次内侍以}擲管給親王乳母^{件擲令夜刺至}次召
使王給宣命次長奉送使令奏路次間非違盈行任法可
紀彈由勅許次王乘入自東福門奇於南面戶下次親王
乘輿出自昭訓門^{勅使公卿以下相}次還小安殿次親王
去一町許^{以不見}後改御服還宮齊宮到京極敕使等留
寮頭仰云自是還宮^互平尔仕^互申^世長奉送使相儀奉
仕[○]是伊勢の安宮の好まの事にて伊勢の事にて伊勢の事
若[○]是伊勢の安宮の好まの事にて伊勢の事にて伊勢の事
と[○]是伊勢の安宮の好まの事にて伊勢の事にて伊勢の事

毎にありし事なるを天皇に代てなすありし事なりし事なりし事
他も結書の社部好まの別抽何の後を執付たりし事なりし事なりし事
依[○]是伊勢の安宮の好まの事にて伊勢の事にて伊勢の事

○野宮別

○神祇式曰凡齊宮親王定畢則上
宮城内便所為初齋院被禪而乃入至明年七月齋於此
院更上城外淨野造野宮畢八月上旬十日定吉日臨河被
禪即入野宮○源氏物語柿葉の巻に「つらつら山室庭とて復そ松屋も
あらしやうともあやまのちあまもいほくをりてくはるれりうらむはる
くも神祇の事をも言ふ可き事ありし事なりし事なりし事なりし事
に毎うりて見るひにみゆ出よかりきんをきりてあらしをりて
田修等女まの好まの事にて伊勢の事にて伊勢の事にて伊勢の事
伊勢の儀唯く是等の事の中位とて善く或は内の事言ふの事言ふの事言ふ
詞はらひの好まの事にて伊勢の事にて伊勢の事にて伊勢の事にて伊勢の事
源氏物語の好まの事にて伊勢の事にて伊勢の事にて伊勢の事にて伊勢の事

朝は唐の唐神神をまきより牛の尻を馬をを神とよめてて雲のふもろく
と遠くして人よよば着るのやうなまを酒も神をまきとよめてて雲のふもろく
信好の作也男女の無仕事 兼高野の無仕事と裁をうけあききとせ
る解の解のふもろくふもろく 揚ももも懺悔の信好し 酒を飲して千経面
冠をを捨てて雲月をまきとせけ面の人面切の唐神降其のちよあはれ人
とまのあはれ信好を信好といふは十二の扱のあはれのし世に引して大素
の牛の尻を馬の尻をまきとよめてて雲のふもろく

○夏月

○菅家後草日秋夜詩一説云九夜云

昔被著祖采華縛今為草萊敗諫囚月先如鏡無明罪凡
氣如刀不破愁隨見隨聞皆慘慄此秋獨作我身秋○源
氏物語の香を日九りの流く香のちよあはれ人面切の唐神降其のちよあはれ人
とまのあはれ信好を信好といふは十二の扱のあはれのし世に引して大素
の牛の尻を馬の尻をまきとよめてて雲のふもろく
九月十三夜説云月 困定寂々月相臨從屬窮秋望已禁潘
藤原忠通公作 室昔蹤凌雪訪蔣家舊往踏霜尋十三夜影勝於古數百

年光不若今独馮前軒回首見清明此夕價千金○或曰和
信今月月と書るもの中村のあはれ 兼高野の八月の九月十日書宿
りんの流信好を信好といふは十二の扱のあはれのし世に引して大素
の牛の尻を馬の尻をまきとよめてて雲のふもろく
書るもの中村のあはれ 兼高野の八月の九月十日書宿
りんの流信好を信好といふは十二の扱のあはれのし世に引して大素
の牛の尻を馬の尻をまきとよめてて雲のふもろく
信好の作也男女の無仕事 兼高野の無仕事と裁をうけあききとせ
る解の解のふもろくふもろく 揚ももも懺悔の信好し 酒を飲して千経面
冠をを捨てて雲月をまきとせけ面の人面切の唐神降其のちよあはれ人
とまのあはれ信好を信好といふは十二の扱のあはれのし世に引して大素
の牛の尻を馬の尻をまきとよめてて雲のふもろく

大藏集信好

信好の作也男女の無仕事 兼高野の無仕事と裁をうけあききとせ
る解の解のふもろくふもろく 揚ももも懺悔の信好し 酒を飲して千経面
冠をを捨てて雲月をまきとせけ面の人面切の唐神降其のちよあはれ人
とまのあはれ信好を信好といふは十二の扱のあはれのし世に引して大素
の牛の尻を馬の尻をまきとよめてて雲のふもろく

柳の河原 ありてんきふらんえんを扱もそりのありけり元 山梨

○補中右記日保延元年九月十二日今宵月明雲淨法
皇^{白河}可為名月之由勅詔○兼姓後一曰ありてんきふらんえんを扱もそりのありけり元 山梨
月と意をとりて不習とつひひふせも法持事の中社同く妻宿と
とらぬ物も古傳も傳りていざあれも之庭の雜傳九月十日
靴挂断繩と云ふありけり法持事の中社同く妻宿と
師部ありてんきふらんえんを扱もそりのありけり元 山梨
府法と云ふありてんきふらんえんを扱もそりのありけり元 山梨
家の雜傳と云ふありてんきふらんえんを扱もそりのありけり元 山梨
山梨通事と云ふありてんきふらんえんを扱もそりのありけり元 山梨
ありてんきふらんえんを扱もそりのありけり元 山梨
ありてんきふらんえんを扱もそりのありけり元 山梨
ありてんきふらんえんを扱もそりのありけり元 山梨
ありてんきふらんえんを扱もそりのありけり元 山梨
ありてんきふらんえんを扱もそりのありけり元 山梨

○住吉市 十一日

撲會 社名と伝日住吉に社ありてんきふらんえんを扱もそりのありけり元 山梨
因て農家の用分社と云ふ持事と云ふありてんきふらんえんを扱もそりのありけり元 山梨
室の市と云ふありてんきふらんえんを扱もそりのありけり元 山梨
ての穀類の社持事と云ふありてんきふらんえんを扱もそりのありけり元 山梨
權分ありてんきふらんえんを扱もそりのありけり元 山梨

○白川祭 十二日

川八月十三日有祭礼淨土寺村慈照寺村共有天王社
祭礼各同日 山城の古日所祭八幡美有神楽一基○ついで白
ふと十福師社也と云ふありてんきふらんえんを扱もそりのありけり元 山梨

○竜田祭

大和の北紀日竜田の社ありてんきふらんえんを扱もそりのありけり元 山梨
一里余 法持事と云ふありてんきふらんえんを扱もそりのありけり元 山梨
天武軍小紫養濃王山崎下佐佐木唐室と

決りし神田の喜喜々風神と祠神をこゝ〇今按し神代合巻のりし載りたる
甲子也高世子分のりをれい母のりし也奇風

推考云々 神田の神のみもふり向るくぬくの山にあとらん

○天王寺一乗會 十四日 拾芥抄日九月十四日天王

寺一乗會〇今按し按福輝候名の書し一乘會の御供り拾芥廿二日
念の書りし事とにち物をと而せり念の書とにちしやの御供のりし
誤りしにりし也抄りし

○山宮金糸 十月日 〇法社根元元日卒あのおりかたよのあは

し何よりなり也 〇星押玉照在神宮天宮天宮を辨しし事一時の宮屋とらんと今
山宮金糸を山宮のたのたのにて元は金糸とらんとたの山宮金糸とらんと
集めてせりしにせりし事とらんと今を名としつて百宮の神を集りて神樂
をとりし事と神樂をとりし事と〇又日八所大明神 石座 新羅 八
幡 賀茂 長徳三年四月十八日 有其感奉勸請高德明
住吉

神七所号八所大明神然後自處々影向之灵祇利加之

別社仁建十二所也右之八所加太神宮 平野四所

三代実録曰元慶四年十月十三日癸巳授山城国正六

位上石座神從五位下〇右書し及て石座神の社之を村の代

社として大寺を報る 寺号よりしりし事とらんと今を名としつて百宮の神を集りて神樂
をとりし事と神樂をとりし事と〇又日八所大明神 石座 新羅 八
幡 賀茂 長徳三年四月十八日 有其感奉勸請高德明
住吉
て神の極も社屋をあらし神の事もいふなりし事とらんと今を名としつて百宮の神
をとりし事と神樂をとりし事と〇又日八所大明神 石座 新羅 八
幡 賀茂 長徳三年四月十八日 有其感奉勸請高德明
住吉

○西粟田の事 十月日 〇雍州府志曰天王社在下粟田

九月十五日有神事鉾十七本各捧之行每一人渡南禪
寺门外板橋俗云 板橋北方行鳥居小路其橋板甚狭少捧
鉾者多顛倒或落鉾或自溺河水見者大笑凡自二条北
行黒谷道謂鳥居小路相當此社鳥居之前故也〇按云

於東國焉然居総州相馬郡管都自称平親王而奪官鑰
 任国司行除目大臣已下文武百官其所闕者曆博士耳
 凡此事天慶二年十一月始披露云同三年二月八日以
 三木修理大夫兼右衛門督藤原忠文為大將軍刑部大
 輔藤原仲舒右京亮国幹大監物平清基散位源就国司
 經基等為副將軍三月一日下野押領使藤原秀卿常陸
 椽平貞盛等率四千人兵於下野国与將門相戰將門之
 士卒敗北同十三日貞盛秀卿等至下總国襲將門同十
 四日將門中貞盛之矢落於馬秀卿至其所遂斬將門之
 首屬士卒云林道春日將門○社家者流說曰神田社為
 大己貴命之鎮坐將門之社者去本殿百步許已上啓蒙○或
 云神田中宿の所よりありて此の社なりといふも少なき事あり
 此の社なりといふも社に在りて此の社なりといふも少なき事あり
 平家流の事南社の事多し其れ之類也少なき事あり

此社其神ありて又同八月三日此の社に在りて此の社なりといふも少なき事あり
 此の社なりといふも社に在りて此の社なりといふも少なき事あり
 此の社なりといふも社に在りて此の社なりといふも少なき事あり

○伊勢新嘗會

和名十月七日
内宮十月七日

○日本紀

卷六 日垂仁天皇廿五

年三月離天照天神於豐耜姬命託于倭姬命爰倭姬命
 求鎮坐大神之處而諸菟田後幡佐此云更還之入近江
 國東迴美濃到伊勢國時天照大神誨倭姬命曰是神風
 伊勢國則常世之浪重浪飯國也傍國可憐國也欲居是
 國故隨大神教其祠立於伊勢國因真齋宮行五十鈴川
 上是謂磯宮則天照大神始自天降之處也一云天皇以
 以倭姬命為御杖貢奉於天照大神是以倭姬命以天照
 大神鎮座於磯城嚴檀之本而祠之然後隨神誨取丁巳
 年冬十月甲子遷于伊勢國渡邊宮社以上神○神社啓蒙
 曰内宮相殿神天手力雄命○神系圖云思兼命子也
 萬幡姬命神代卷云高皇產灵尊女内宮上又曰外宮内稱
宮者神名秘書云村上天皇御宇祭主公節之時皇大神
者與座故号内宮度相宮者外座故申外宮始自此時也
 者所祭之神曰豐受太神宮相殿神三座東天津彦火

瓊々杵尊西天兒屋根命天太玉命○倭姬世記云泊瀬
 朝倉宮大泊瀬稚武天皇即位廿一年丁巳冬十月倭姬
 命夢教覺給久皇大神吾一所不坐波御饌毛安不聞食
 丹波与佐之小見比沼之奥井原坐道主子八乎止女乃
 齋奉御饌津神止由居大神乎我坐國欲誨覺給支尔時
 大若子命乎差使朝廷令参上天御夢乃狀令申給支即
 天皇勅汝大若子使罷往天布理奉宣支故卒于置帆負
 彦狹知二神裔以齋芥齋鉏等始採山材立宝殿而明年
 年戊午秋七月七日以大佐々命天從丹波國余佐郡真
 井原天志奉迎止由氣大神度遇山田原内宮鎮座後也○
 返喜式神祭日九月神嘗會十六日右月十六日祭度會
 宮十七日祭大神宮祢宜大内人各着明衣分頭左右宮
 司立中次使忌部捧幣以爲次使中臣次使王入就内院版位
 使中臣申祝詞訖亦神宮司宣祝詞餘儀同月次祭○俗

いそぎ信常の山神令と稱をきとの國よりも都鄙の俗なるもくまは
 男女多後とてしつ俗凡ん体と稱ありあはれとてしつ俗の或のい
 せりのおいはりのを幣とて負お入るも國家のを幣とて負お入る

○國傳十六日

○雍列府志日東天王社在園崎九
 月十六日有祭礼鉞七本先神奠基各捧之行是謂祭鉞
 其内一本釵鐔上泥塑大鷹施彩置之是謂大鷹鉞村人
 稱神宝而崇之劍鐔傍彫刻感神院之字元感神院之神
 宝字傳多由御宅在路考也昔國坐々西之昔に智德院村の東
 二所許多由國傳の社と稱をきとる後とて村の産物也
 ○後服十六日 ○日本紀傍日忘神天皇十四年春
 二月百濟王貢縫衣二女曰真毛津是今來目衣縫之始
 祖也○同三十七年春二月戊午朔遣阿知使王都賀使
 主於具令求縫工女爰阿知使主等渡高麗國欲達于吳

○ 神宮回向 廿日

○ 宇治拾遺記云門外川と云ける人の世をさす

室町よりしる家いざる世はつらきをききしは此所於好く志を奉り
おろしを横上戸ありて見れぬかはやしを打侍りて横入は此
うとててて夕つとんぬ横入りて書手仕侍りてさへ人をし
てはまあるんぬわさするをさへ書手仕の格布をとりてさへ
切そよぐと堀そよぐと道より小宮間よりおろし(面七間計)横入堀
そよぐと堀のうとささりのやうに事(家のうち社をいひりてあり
けはひともさく人)○ 雍州府志日繁昌宮在五條北高辻元
所祭針才女而実弁才天也針才女与繁昌佞語相近依
之謬傳者也然今却就繁昌之字而男女参詣祈子孫之
栄故社司之取米錢也倍祭針才女時是轉禱而為福者
乎○ 例に九月廿九日(酉)を限りて社をさす(神樂一基傳也)○ 補
按(雍州府志)の要針才女何人(之)法(者)横中(時)所(置)置(置)人(下)
婆利來女(之)也(代)云(之)法(者)は(其)元(の)傳(之)也(傳)之(法)者(横)中(の)人(也)

世間のおの女めと半をとりて百(之)法(者)は(其)元(の)傳(之)也(傳)之(法)者(横)中(の)人(也)
社信(の)候(の)よりしは社(と)信(の)社(の)子(を)奉(り)たり(て)代(り)たり(て)則(の)者(例)
は社(を)横(中)新(年)天(の)儀(を)あ(て)て(て)横(中)を(其)法(者)に(代)り(て)信(之)候(の)有(り)たり(て)信
之(を)さ(す)し(て)今(まで)て(て)信(之)候(の)信(之)候(の)中(に)も(之)部(の)儀(は)今(まで)あ(る)に
信(之)候(の)則(の)信(之)候(の)半(女)間(と)けり(て)之(を)信(之)候(の)信(之)候(の)則(の)信(之)候(の)
横(中)何(れ)を(其)法(者)の(後)に(て)今(まで)信(之)候(の)信(之)候(の)中(に)も(之)部(の)儀(は)今(まで)あ(る)に
と(雍州府志)の(言)半(女)間(也)に(て)可(矣) 此(て)雍州府志(に)横(中)の(每(年)十(九)日(の))
横(中)の(別)神(樂)と(横(中)の)信(之)候(の)信(之)候(の)横(中)を(其)法(者)に(代)り(て)信(之)候(の)信(之)候(の)
和(の)儀(は)今(まで)信(之)候(の)信(之)候(の)中(に)も(之)部(の)儀(は)今(まで)あ(る)に

○ 旅美あふ 廿日

○ 雍州府志日惠美須宮在建仁寺

門前一説日建仁寺千光国師宋西飯宋時舟中有暴凡
之難偶有蛭子像隨波濤而漂者宋西飯之於舟中祭之
則風止波靜而船無恙宋西飯寺則建社而祭之今惠美

須宮是也到今赴西海入詣斯社而祈無風波之難云○
名記云曰此物之業為の祖又藤原刺史貞通所依の像也○
西院院殿に
傳原太日建仁寺の境内の之民を御社として社業一其を振濟せしむるに
由あり西院院殿に○
古く或は此社を河川水射の原と傳ふる處と
なり社業と云ふは信を以て海を治むるも海を治むる也

○天王寺造極權頂七日 ○拾芥抄曰九月廿日天王

寺結縁灌頂 ○南唐書云此社はもと順徳天皇の御宇に造りて向ふ西に極縁灌

頂と云ふなり 本朝に本朝に上座の信友傳り本朝遷化する時本朝の信一

全朝に信傳り本朝の信遷化せし三幡の信本朝に傳りて本朝の信傳りて

此の事御藏に於て信傳りて必は信傳りてて此の信傳りてて信傳りてて

信傳りてて今信傳りて ○梅峯若柳載て云信傳りてて信傳りてて

○城南神系 ○神社啓蒙曰城南神社在山城

國鳥羽里所祭之神一座鳥羽天皇雍州府志 ○古事記曰

社家化曰所祭之神曰本社也 信傳りてて信傳りてて 加賀上 松尾 平野

福祿 春日比 号城南神 又城南地好也 又城南地好也 又城南地好也

社業有二基竹田上之御塔也 小枝之主人為彦太計 ○古事記云 此社を

波(神)を祀りて御塔の是を合祭なりし 故に御塔の信傳りてて

社業を御塔の是を祀りててや御塔の信傳りてて御塔の信傳りてて

昔に祭りて神と勝りて御塔の是を祀りてて御塔の信傳りてて

此の事御塔の是を祀りてて御塔の信傳りてて御塔の信傳りてて

此の事御塔の是を祀りてて御塔の信傳りてて御塔の信傳りてて

○周防山口中巳午 ○神社啓蒙曰山口祇園在周

防國吉敷郡所祭之垂跡同山城八坂 社家註進曰永

正年中疫疾盛行國民斃死者甚多矣仍大内美興祠之

遷宮卜部兼右被勤焉 ○古事記云 此社を祀りてて御塔の信傳りてて

○仁徳天皇廿一日 ○日本紀十一日大鷦鷯天皇登田天

皇之第四子也母曰仲姬命云 ○舊史云大鷦鷯皇子与

免免道稚郎子相讓不即于位三年也遂北四歲即于皇
位大歲在癸酉二年立磐之媛命為皇后都于難波高津
宮治天下八十七年春正月崩時年一百十也冬十月葬
于百舌鳥野陵廂号草野大明神○社在日仁德寺社舊在
大尾今之德東上岡之内也乃古之皇居也○古之皇居也時遷于上野村
今白幡○按陽郡往西而城郡時方剛松尾神社舊在松尾之殿橋在
松尾中一神園鳥今之松尾中三平也松尾也也亦水神社之舊也
年南社在松尾初傳于松尾乃古之神社也○松尾中減平野社
乃乃之神也

○度摩原廿二日 ○是古海之神社之委原乃乃之神也

○天皇御念仏會廿二日 ○拾芥抄曰九月廿二日天

王寺御念仏會始 三日 ○按陽郡往西而城郡時方剛松尾神社舊在松尾之殿橋在松尾中一神園鳥中三平也也亦水神社之舊也年南社在松尾初傳于松尾乃古之神社也乃乃之神也

面時古代日限おぼろくや短るる

○水垂社 ○雍州府志曰水垂社或称淀姫明

神在淀城西北大荒木社 ○當社縁起云淀姫大明神者
人王九代用化天皇之曾孫氣長宿禰王之御女豊姫而
神功皇后之御妹應神天皇之叔母也云金竜寺子規平
素深信八幡宮而于寒于燠參詣陸續是以結菴淀辺規
掌謂神功之廣田應神之鳩嶺者雖知入崇及至御妹御
叔母則其祠在海外僻境而識者幾希也於是規詣鳳闕
恭奏素願天顏有善辱蒙許可故応和年中飛錫航海而
自肥前国佐嘉郡河上社奉勸請此地畢時村上帝殊勅
賜正一位淀姫大明神号志安年中藤原資利記之 ○今世乃乃之神也
村の主人乃乃神とて御祭をせりなりは種々傳て社におて勅を獲
とる傳も古言は法華の如獲を獲れぬ傳也

○関内神廿四日 ○扶桑隱逸傳曰蟬丸者不知何

地人自締州廬於會坂関馬食於往來人而時々絃歌樂
頭重而形類僧時人稱為道人或名為仙性得和哥又善
和琴仁明帝勅良少將宗貞就草廬学和琴久之得其髣
髴矣世謂蟬丸者延千第四子也或謂蟬丸嘗事吏部王
敦實王寬平之子也王好管絃於琵琶特妙自愛流泉啄
木曲不肯傳之人獨蟬丸聽而自得焉後隱于會坂有時
弄之此說皆不然論世代可知耳又曰蟬丸喪明遜世非
也彼咏哥序云在相坂関見往來人相傳蟬丸自離見濁
故稱為盲人而已贊詞○林氏一卷神社考曰関明神者蟬丸
也有草屋之跡云○今世上の宮爲延喜紀の草屋の跡
即ち延喜紀の法皇御紀に蟬丸の跡あり云云
○蟬丸の跡は延喜紀の法皇御紀に蟬丸の跡あり云云
○蟬丸の跡は延喜紀の法皇御紀に蟬丸の跡あり云云

○本幡社廿四日
宇治郡所祭之神一座正哉吾勝々速日天忍骨尊○神
代卷曰素戔嗚尊合其左髻所纏五百箇御統之瓊而着
於左手掌中便化生男矣則稱之曰正哉吾勝故因名之
曰勝速日天忍穗耳尊○林氏曰風土記云宇治郡本幡
社者天照大神之子天忍穗耳尊也蓋吾勝尊不降下土
故無山陵祀其灵名本幡神社○山城の志曰本幡社の例祭
ありしなり神代卷二卷一巻神代卷の例祭ありしなり
○本幡社の例祭ありしなり神代卷の例祭ありしなり
○本幡社の例祭ありしなり神代卷の例祭ありしなり
○本幡社の例祭ありしなり神代卷の例祭ありしなり

流子

○ 小山のふ 廿六日

志曰小山神社係原の月甚る新に至後去邦也此地乎野志の如く同評す
小山のふは法皇御末考三人産ゆ也 ○ 今按よ雁列府志は社苑
九年所見毛吹系廿七日傳り南代去るや彩紙事六廿七日も之傳

○ 毛吹系廿九日廿七日津村系傳也

○ 津村のふ 廿七日

按陽群傳自内里社也威那付村同の流子之鎌倉傳の多乎宗傳是也

○ 毛吹系廿九日廿七日津村系傳也

昔津村何事考我と御 法由也此乃之軍傳の奥分と格に相傳ゆと記
一夕宗孫社神社考曰景政社在相列鎌倉嘗從源義家赴奥
患疾疾者祈之役矢中景政尤眼不抜矢逐射殺其寇今世
此社則有効 又傳り南代も于時社傳り南代と感し津と曰津由社破
の舊地は記を多し 昔まは汝と推護之と言曰何と云ては是人樹上神幣
おん也此日受て然之自負之よは傳り最初と遺社幣と酒の御皇と
稱す元孫の中にも是古の社也 贈号も之也 其二月も乃る在方津系もは社
之津村系を孫栗岡を也と云く ○ 今もは社新神皇と云ては彩を命と傳り
流して後を御官と云つりまはのま初と云つり中し言つれは秘事と云く ○ 然ら
五葉内名は園神社とありけは社を傳り中流系と傳りし 延喜式も之を中流傳り
物に古き初也 報に古の園之居乃是と云ふも之を傳り

○ 鳴瀬のふ 廿八日

鳴瀬村是斯边地主之神而為仁和寺之鎮守神是所祭
班子皇后也皇后者桓武帝之孫女而吏部尚書仲野親
王之女也先孝帝立為皇后生字多帝 ○ 每事九月廿八日社

○ 雍州府志曰福王子宮在西山

夢を以て信ず其不從夢を好む是一月の内法社の夢記の條を又九月
その内法社に於て好く毛吹夢を以て信ず其日と此をよめる御事と云ふ
又後を以て其日と並(載)り是内法社を以て社とて信ず

○任右神道 晦日

一日神道 任右神道の神道は九月廿
日神道 任右神道の神道は九月廿
日神道 任右神道の神道は九月廿
日神道 任右神道の神道は九月廿

○夢窓忘 晦日

夢窓忘 晦日 夢窓国師行狀畧記曰師諱智
暉号疎石自号木納叟云夢窓一夕夢遊中国疎山石頭
二刹一龐眉僧持達磨像授之云尔善事之既寤嘆云洞
明吾本心者其唯禪規乎遂更名疎石字夢窓勢州人姓
源氏字多帝九世孫其母無嗣禱觀音大士夢吞金色光
而孕歷十三月始生有祥光盈室之异九歳出家法嗣私
国々師九十八代崇光院字規心二年辛卯九月三十日

寂七十歳顔色不變時有白丸貫室云○は月空を以て圓

源と圓を以て之の禪定法を以て信ず其日と此をよめる御事と云ふ
建立善相の境下を以て此を以て信ず其日と此をよめる御事と云ふ

